

～あなたはイエス様の優しさに生きていますか？～

(マタイ11：28～30)「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(28)私たちの多くはこのイエス様の優しさに触れ、安らぎを得ています。イエス様が十字架にかかり、私たちの重荷を背負い、私たちの心のうちの悲しみや全ての重い患いを背負ってくれたのです。だから私たちの重荷は私たちの中にはありません。もし重荷があるとすれば、勝手にあなたが自分で戻しただけです。「わたしは心優しく、へりくだっているからあなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい」(29)イエス様はわざわざ「わたしは心優しく、へりくだっている」と言いました。このやさしさに目を向けなくてははいけません。あなたが優しくなりなさいとっているのです。「くびきを負う」とありますが、これはただ、母牛が子牛にくびきをどう引っ張るかを教えるだけなので、子供は母牛と一緒に歩くだけで、重くありません。子牛はつらいと思って農作業をしていません。それはイエス様が歩き方を教え、優しさを示したからです。あなたは優しいですか？正しいことを正しい方向に導くのが本当の優しさです。そこに優しさが伴わなければ意味がありません。「こうやるのよ」「ああやるのよ」「こうやらなきゃだめなのよ」そんなことは聖書には書かれていません。イエス様はいつも自分で気づくように導いたのです。ザアカイがイエス様に会いに来たとき、いちじく桑の木に登っていました。ザアカイはわざわざこのいちじく桑の木を選んで登りました。この時期、いちじく桑の木に普段は羊飼いをしている農夫が登っていました。ザアカイは、ヘロデ王の食事に招かれるほど偉い人でしたが、人々にザアカイだと気づかれるのが嫌で、農夫に紛れてかくれて会いに来ていたのです。ところがイエス様は彼のところにわざわざ行き、「ザアカイ」と名をよばれたのです。そしてザアカイは心を開き最後は恥もい誰に何と思われてもいいとかわったのです。イエス様は彼が求めていたものを見たのです。イエス様はいつもその結果ではなくてどうしてそうなったのかを見ていたのです。でも私たちは結果を見て「あの人はこうだから」と決めつけてしまいます。銭形平次を知っているでしょうか。このドラマの主題は「罪の結果を見るのではなく、罪の原因を見る」です。これはイエス様の価値観です。時には厳しいことばもあります。けどそこに優しさがあったのです。人を権力や権威で押しつぶしたり、相手を裁き結果だけを見て「あいつはこんな奴だから罰せられればいい」なんて言ったりしませんでした。世の中はあまりにも結果主義です。でもイエス様の優しさの目線はいつも結果ではなく原因の追及だったのです。イエス様がサマリヤの女性に会いに行ったとき、差別され「どうせわたしは」と思っている彼女に「わたしに水をください」と言ったのです。これが優しさです。すると「なぜあなたは・・・」と彼女が心を開いたのです。あなたは人々に「なぜ」という思いを与えていますか。人々の心を開くことが大切です。私たちは人に石を投げるのは大好きです。だからイエス様は姦淫の現場で捉えられた女性に対して、「罪のないものだけが先にやりなさい。」といました。「先に」・・・複数ではなく一人に問いかけたのです。人ではなく自分を見なさいといったのです。人に何かを伝えようとしている人は結果に伝えても変わりません。原因をしっかりと見ていく必要があります。「自己中心、イライラ、優しさ忘れる、思いやりを持つ、絆を大切にす」あなたは今、どうですか？①**愛にあふれるキリスト花嫁教会**。教会は愛があふれていなければいけません。あなたは教会です。あなたが愛でなければ誰もあなたからイエス様を見出すことができません。優しくしようと思ってもあなたが教会であること忘れてたらイエス様の愛がそこで終わってしまいます。あなたは愛の答えをその人に出してあげていますか。その人が求めていることを感じとっているのでしょうか。あなたも受け入れてもらってこの場所にいるはず。優しくされ愛された人は、それが厳しくても乗り越えられます。でも、そうでなければ厳しさはムチです。あなたは出向いて行ってその人がほしいことをあげなくてははいけません。(Iコリ13：4～8)「寛容 親切 ねたみ、自慢、高慢・・・」教会のからだを汚してはいけません。愛を追い求めてください。②**あなたは優しいですか**。原因をみて結果を見ない。赦すことができるそれが優しさです。赦すことが大切です。赦すことは愛です。キリストの教会はただただ赦しです。愛すること赦すことを優しさの中で実践していかななくてははいけません。(IIテモ2：22～26)赦されると赦すことがわかります。優しくされると優しくできるのです。③**生き様を通して**。人を変えることができるのは生き様です。聖書(基本)に戻らなくてははいけません。(Iヨハ3：16～19)イエス様の生き様で私たちは愛がわかったのです。これがくびきです。イエス様が十字架を背負っていくところに子牛のようについていっただけです。「兄弟のためにいのちを捨てる」(16)兄弟とはあなたの隣にいる人です。たたかれても打たれても抱きしめる、そのくらいの覚悟で向き合うのが教会です。いつまでも愛することが大切です。「それによって、私たちは自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです」(19)愛することは最終的に自分に返ってくるのです。今日から、言葉や口先だけでなく、行いと真実をもって、最後まで愛していきましょう。(要約者：岩崎 祥誉)